傑作時代小説

# 太田蘭三

# 鯉四郎事件帖

## ――浪人釣り師

NON POCHETTE

NON POCHETTE

◆「ノン・ポシェット」創刊のことば

ノン・ポシェットは、ノン・ブック、ノン・ノベルの姉妹シリーズです。しかし、ポケットなり、ポシェットなりに楽に入る小さな判型、また既成のノン・ブック、ノン・ノベルから生み出されたという事情からいっても、むしろ両シリーズの子どもと申せましょう。

両シリーズの数ある本の中から、豊かな心、深い知恵、大きな楽しみに満ち、年月を経ても色褪せない「現代の古典」となるべきものばかりを厳選したつもりです。どうか親版のノン・ブック、ノン・ノベル両シリーズ同様、このノン・ポシェット・シリーズをご愛読いただき、進んでご意見、ご希望を編集部までお寄せくださるよう、お願いいたします。

昭和六〇年八月一日

NON・POCHETTE編集部

●ノン・ポシェット NPN94

**鯉四郎事件帖** 傑作時代小説

昭和63年6月1日 初版第1刷発行

著名 太田蘭三

発行者 伊賀弘三良

発行所 祥伝社

東京都千代田区神田神保町3-6-5
九段尚学ビル 〒101
☎03(265)2081(営業)
☎03(265)2080(編集)

印刷所 堀内印刷

製本所 豊文社

万一、落丁・乱丁がありました場合は、お取りかえします。 Printed in Japan.

ISBN4-396-32094-9 C0193

©1988,Ranzō Ōta

傑作時代小説

# 鯉四郎事件帖

## ――浪人釣り師――

太田蘭三

祥伝社 ノン・ポシェット

『浪人釣り師《大江戸必殺剣》』改題

# 目　次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一話　大鯉（おおごい）と仇討（あだうち）　7
第二話　フナと水茶屋の女　35
第三話　タナゴと辰巳（たつみ）芸者　63
第四話　ヤマメのような娘　95

第五話　ハゼと神隠し　147
第六話　イワナと女と死と　217
第七話　寒バヤ釣りと消えた女　277
あとがき　328

# 第一話

## 大鯉（おおごい）と仇討（あだうち）

天保四年に刊行された『東都釣案内図』をひろげてみると、

〈――鯉は春、桃の花の開くころをもってよき釣時とし、秋の彼岸すぎもよしとす〉

と、記されている。そうしてその釣り方を、文政年間に黒田五柳の著わした『釣客伝』から見ると、つぎのように述べられている。

〈――竿、糸、針、丈夫にいたし、浮釣りにてよろし。餌は、どばみみず、または切餅、団子。大麦粉、白ごまの粉をねりまぜて釣るべし〉

## 一

「時季はよし。……しばらくぶりに鯉をねらってみるか」

鯉釣りにおもいを馳せるとき、船田鯉四郎は、きまって亡き父親を想い出す。

野鯉の釣り師は、野武士の風格があると言われている。父彦四郎にも、そんな風格があったようである。

彦四郎の釣り好きは申すまでもない。いや、むしろ釣りキチといったほうがふさわしいほどの男で、息子に鯉四郎と名付けたのは、武骨者ゆえ、「恋をしろ」などと粋なこころは毛頭なく、ちょうど鯉四郎が生まれるころ、彦四郎自身が野鯉の釣りに凝っていたせいであろう。

彦四郎は、剣は天然無心流を遣い、居合いの名手であった。それゆえ、たのまれては、近所の町道場の代稽古をやり、ときには、内職の傘張りや楊子けずりなどをして、ほそぼそと生計を立てながら、暇をこしらえては、釣り竿をかついで、両国の百本杭のあたりへ通ったものだった。

当時、両国橋にほど近い横網町の百本杭は、水防のための蛇籠の代用に河岸に杭を打ちこんだもので、ここが鯉釣りの名所となっていた。釣り人たちが、まるでトンボのように杭の上にとまって、糸を垂れていたものである。

幼いころ、母をうしない、男手一つで育てられた鯉四郎も二十になり、代稽古の父親の、そのまた代稽古がようやくつとまるようになったころだったか、市ヶ谷見附のお堀で、三尺七寸の大鯉のあがったことがあった。

――淀川の鯉と琵琶湖のフナをはるばるとりよせて、赤坂の溜池へ放養したのは二代将軍秀忠のころである。

そのころ、鯉やフナを百三十里の遠方から、生きたまま運ぶのは容易なことではなかった。古茅を藁砧でかるく打ちほぐした苞の中に入れ、それを水でしめらせて籠につめ、昼夜ぶっ通しで東海道を飛ばして、六日目に江戸に着くと、すぐと苞を解いて、水に放ったものである。

ともあれ、その大鯉の噂を耳にするなり彦四郎は、それこそもう目の色を変えて、その場へ駆けつけ、莚にくるまれても、頭と尾ヒレを出している、その見事な大鯉を目のあたりに見ると、

「うーむ、かほどの大ものがいたとは！」

思わず驚嘆と羨望の呻きをあげたことだった。

以来、彦四郎は、生涯にせめて一度、三尺の大鯉を、わが手で釣りあげてみたいという念にとりつかれたのだが、とうとうその念願を果たさず、六年前の冬、深川の木場へタナゴ釣りに出かけていって風邪をこじらせ、ついに他界したのであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

死に際に、鯉四郎が末期の水を口にふくませてやると、彦四郎は絶え絶えの息の下から、「わしの釣りあげたいちばんの鯉は、二尺四寸だった……。ただただ心残りは、三尺の大鯉をあげなかったことだ。三尺の大鯉を……、まことに残念至極だが……」

これが、最後の言葉となった。

――こうした釣りキチの鑑ともいうべき父親の愛竿が、いま鯉四郎の手にあった。

三間、四本継ぎの鯉竿である。穂先に布袋竹、穂持ちと穂持ち下は矢竹、そして手元は真竹でできていた。彦四郎が自分の手で竹をえらび、芽取り、あぶら抜き、晒、矯め、切り込みからウルシ巻きまで、たんねんに仕上げたもので、「穂先は野ッ穂で、下の矢竹は三年竹だ。どんな大きなものがきたって、びくともするものか……」こう言って、日だまりにすわって手入れをしながら、よく自慢したものだった。

「野ッ穂」というのは野布袋、つまり野生の布袋竹のことである。岩石や砂利の多い地味のわるい土地に生え、風雪にもまれ、雨に打たれ、きたえにきたえられて育つから、自然と竹質が強靱になり、弾力にも富むことになる。で、この良質の穂先竹を、竿師も釣り師も珍重したものだ。

そして、矢竹の三年竹、つまり古竹はシモリ竹と呼ばれて、目方は多少重いが、すこぶる丈夫な良竹であった。武蔵の国八王子、いまの東京都八王子市の矢竹は、とくに皮張りが強く、肉質が厚くて、弾力性にもすぐれていたのである。

この親父自慢の鯉竿を、鯉四郎は、わずかに油をしみこませた布切れで、ていねいに拭きおわると、二本に仕舞い、竿袋にすべりこませた。そのおり表の戸があいて、

「ごめんよ、旦那……」
と、銀次が顔を覗かせた。
おなじこの長屋の真向かいに住む男である。年は二十四、五。浅黒い顔で、小柄だが、きりっと締まった敏捷そうな体軀を縞木綿の袷で包んでいる。一見、小粋でいなせな職人に見えるが、通称「白魚の銀次」と呼ばれる巾着切りであった。
遠慮のない男だ。雪駄を脱ぐなり、上がり込んできて、
「きのうの晩は、べらぼうにきれいな月夜でしてね、夜釣りとシャレこんで、わざわざ中川の御番所まで足をのばしたんだが、なんと五寸たらずの鯉っ子二匹と、あとは小ブナばかりでございんしてね」
「しかし、坊主よりましだろう」
「ところが、旦那……、二尺八寸の大ものをあげたのを、この目で見たという野郎が隣りで釣っておりやしてね、それが、なんと、紫色の鯉だというんだから……」
「ほう！」と、たちまち鯉四郎も目の色を変えて、「で、その穴場は？」
「ちょいと遠いんですがね。玉川の、日野の渡しの手前だそうで」
「よし、出かけてみるか」
「へっへへへ、好きだなあ、旦那も……」

## 二

甲州街道は、もうすぐ武蔵野に入る。

道端に白い小さな野菊の花が咲きこぼれ、ススキの原が陽射しをあびて銀色に照り映えている。放れ馬が一頭、尾を振りながら草を食んでいた。

銀次の目が、その馬の尾にとまると、浅黒い顔が喜色で輝いて、

「ごらんなせえ、旦那……。いい尻っ尾をしてますぜ。五、六本、ひっこぬいてきやすかね」

釣りキチの目には、馬の尾が、たちまちハリスに見えてくる。だが、鯉四郎は苦笑を浮かべて、

「よせよせ。小もの釣りじゃあるまいし」

そのまま足をすすめる。それから一刻ほどたって、陽が釣瓶落としに沈みかけたころ、ようやく内藤新宿の家並に入った。

その夜は新宿泊まり。そしてあくる日、宿を出立したのは、陽がかなり高くなってからであった。

うららうらと凪いで、あたたかい陽の下を釣り遊山のふたりは、のんびりと歩いていった。

鯉四郎は菅笠をかぶり、袖無羽織をひっかけて、縞織の野袴の下に脚絆をつけていた。腰には黒鞘が一本。肩に竿袋と玉網をかついでいる。大物ねらいゆえ、樅の三ツ又の枝をためてまるくした縁の、底が深くて、柄の太い玉網である。網は、うす渋を三回ひいたものであった。

一方銀次は、まっ白い股引、紺の草鞋ばきで、右の肩には木綿の半合羽をまるめてひっかけ、左の肩には、大きな生檜と手行李を手拭で結びあわせて、振りわけていた。

生檜、つまり桶箱は、内がわに赤いウルシを塗ったもので、中に、餌箱やら仕掛けの糸巻きなどがおさまっている。

やがて、上高井戸、からす山をすぎて、布田五ヶ宿へ入る。ここで、昼食をとった。つぎの府中まで、わずか一里二十三丁である。

まだ陽は高かったが、府中で宿をとることにした。

中屋という旅籠であった。

濯ぎをとって、ふたりが通されたのは、二階の床の間つきの八畳だった。一風呂あびて、道中の埃をさっぱりと落としたあと、鯉四郎は茶を一服飲んで、煙草盆を引き寄せた。銀次は立っていって障子をあけ、手摺によりかかって、ようやく陰りはじめた往来を見おろした。

そのとき、ふと銀次の目にとまったのは三人連れの武士の一行だった。いずれも黒の塗笠をかぶり、野羽織に野袴、腰の大小にラシャの柄袋をかけていた。そして供の中間には鎧櫃を、若党には挟箱をかつがせている。かれらは、いかにも傍若無人といった風情で、五ヶ宿のほうから、通りをいっぱいに押し歩いてくる。

客を呼び、袖をひいていた女たちが、いっせいに軒下に引っこんだ。馬子が轡をとって、あわてて道端へよける。

「ちぇっ、御用道中か……」と銀次が舌打ちをし、それから鯉四郎に首を回して、「気にくわね

え野郎どもがやってきやしたぜ」。
そう言ったとき、鼻っ先の軒下へ、黒の塗笠が三つ、横に並んで歩み寄ってきた。
困惑の表情をいっぱいにうかべた三十がらみの番頭が、ふたりの部屋へ、おずおずとあらわれたのは、それから間もなくであった。
「まことに申しわけございませんが、お部屋を、お移りねがいたいのでございます」
「なにいっ！　ここを出ろってえのか？」
銀次の声が大きくなった。番頭は、ますます小さくなって、揉み手をしながら、
「勝手なおねがいでございますが、そこをなんとか……」
と、語尾をとぎらせ、きゅうにおびえた目になった。
のっぺりとした白い顔が、番頭の背後に覗いたのである。さきほどの武家のひとりらしい。面長で、鼻すじの通った殿様顔だが、切れ長のその目は、赤くにごりをおびていた。
「拙者は、直参の青木軍太夫と申す。さっそくだが、この部屋をゆずりうけたい」
青木軍太夫は、敷居際に仁王立ちのまま直参という言葉に重みをかけて言った。
「ゆずれったって、そんな勝手があるもんか。直参の御用道中なら、本陣へ泊まりゃいいだろう」
「だまれ、下郎、だまれ！」
不敵な銀次の面へ怒声がとんだ。よほど癇性な男なのだろう、左手の親指が、もう大刀の鯉口を切っている。

「よせ、銀次」と、鯉四郎がおだやかな声で制して、「おゆずりしよう」

番頭の案内で、ふたたび通されたのは、下の六畳の間であった。小窓さえない、黴くさい臭いの、むうっとこもった部屋である。行燈に映し出された畳は、縁がすり切れ、赤茶けて、足の裏にべとつく。

「ちくしょう、こんなところに押し込めやがって。蒲団部屋ですぜ、ここは……」

中っ腹で、銀次がぼやいた。が、鯉四郎は苦笑を洩らしただけで、

「野宿より、ましだろう」

「だけど、旦那。女を呼んで、いっぱいやろうと、楽しみにしていたのに、……ここじゃ、メシを食う気もしませんや」

そこで、ふたりはぶらりと旅籠を出た。

半丁ほど歩くと、居酒屋があった。鯉釣りに来たからには、まず鯉の匂いだけでも嗅いでおこうというわけではないけれど、鯉濃汁を肴に地酒をかたむけたあと、いっぱい機嫌で、ちょっと気の大きくなった銀次が、ぱっと壺をあける仕種をし、鯉四郎の先に立って、縄のれんを頭で割った。

## 三

「はい、ツボ」

中盆が、気合いに似た声をかけた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com